

支局長 からの手紙

写真では見上げるばかりに大きく感じた仏像が、実際には手のひらに載るほどだと知って驚くことがある。和歌山市のMsギャラリー12番丁で開かれている彫刻家、橋本和明さんの個展(26日まで)の案内はがきにあった写真もそう。合掌した人物が舟に横たわっている石こう像なのだが、きつと床いっぱいには舟が鎮座しているのだろうと思ってしまう。出かける、長さはわずか55分。力のある作品は大きく見える。

力とは表現したい思いの深さと、その裏付けとなる鍛錬の蓄積であろう。そんなことを思ったのは、県内唯一の社会人硬式野球チームである「マッゲン箕島」を、拠点とする有田市の球場で取材したからだ。和歌山や大阪などでスパーを展開する「松源」の支援を受けるクラブチームであり、選

石こう像の作品「発舟(ふなだち)―その先へ」と、制作した彫刻家の橋本和明さん

―和歌山市で



手は店舗で早朝から昼ごろまで働いてから練習にやってくる。お盆など書き入れ時は終日、仕事だ。同じ社会人でも資金や待遇に恵まれた大企業のチームとはあり方が異なる。ハードな日々を送るマッゲン箕島の選手たちは9月にあった全日本クラブ野球選手権で優勝し、社会人野球の2大会の一つ、日本選手権に出場する。今回で8回目となるが企業チームの壁は厚く、まだ白星がない。

黒土の内野にあるベースをそれぞれ囲むように白い線が引いてある。ノックバットを振る原井和也監督(57)いわく、日本選手権を戦う京セラドーム大阪のグラウンドを想定している。ドームはベースの周囲だけが土だ。「送球の時に味方が捕りやすいように、土ではなく人工芝にパウンドさせるためです」。ワンプレーごとに選手同士で改善点を指摘し合う声が飛ぶ。

指名打者として中軸を担う白滝恵汰内野手(25)に事務室で話を聞いた。名門の履正社高校時代から強打で鳴らしたが、心に刻む負けがある。2018年夏の甲子園を目指す北大阪大会準決勝だ。大阪桐蔭をリードして九回2死・無走者。「流れは完全に履正社で、勝ったと思っている自分が

いました。そこから逆転負けし、大阪桐蔭は甲子園で全国制覇。自分たちも甲子園で十分に戦える自信がありました。今、仕事との両立はキツイですが、あの悔しさがあから野球を続けられていま

す。

ニコニコ顔とふくよかな体で愛嬌たっぷりの白滝内野手は、グラウンドに出ると別人になった。腹をすかせた猛獣のように不穏な目つきでのっしのっしと歩き、打撃ケージに入ればバット一閃、ピンポン球のように外野へ飛ばす。ここぞの場面での勝負強さは折り紙付きだ。西川忠宏監督(64)は「顔面に死球を受けて骨折しても、当たり前のように試合に出続ける。昭和の男、サムライですよ」と頼りにしている。

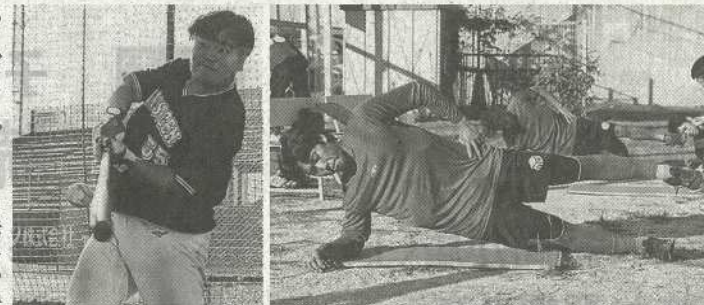
忘れ物と「大人の甲子園」

クラブ選手権で最高殊勲選手賞に輝いた松村亮汰投手(23)は山陰の強豪・鳥取城北高校の3年生だった20年、新型コロナウイルス禍で春と夏の甲子園大会が中止になった。多くの高校球児が涙にくれた。大学に進んでプロを目指した。右肘をけがして思うように投げられず……。マッゲンに来て球速が戻ってきました。自分の野球人生、大きい大会ってあんまり経験してないですよね」。控え

めにぼつりぼつりと話し、先輩にイジられる愛されキャラクターの人だった。

マッゲン箕島の選手たちには「忘れ物」がある。あの時、もっとこうしていれば、あれさえなければ……。多くの大人たちが自ら青春を終えて現実と折り合っている中、彼らはあきらめない。根性である。日本選手権の初戦は開幕試合となる28日午前10時、相手は東京ガス。この大企業から悲願の一勝を挙げてほしい。野球エリート街道を真っすぐ来なかったからこそ、あふれる思いがある。「大人の甲子園」でそれをぶつける。

【和歌山支局長・鶴谷真】



①打撃練習に取り組む白滝恵汰内野手②トレーニングに励む松村亮汰投手(手前)―いずれも有田市で